

中学校 国語科 学習指導案

指導者 篠原 涼

日 時	令和7年11月28日（金） 第1限 9:30～10:20
場 所	第4研修室
学年・組	中学校2年A組40人
単 元	「短歌十首」（『現代の国語2』三省堂） 「扇の短歌八首」（『新編新しい国語2』東京書籍）
目 標	1. 作品の特徴を生かして朗読するなどして、古典の世界に親しむことができる。（[知識及び技能]（3）ア） 2. 文章を読んで理解したことや考えたことを知識や経験と結び付け、自分の考えを広げたり深めたりすることができる。（[思考力、判断力、表現力等] C 読むこと オ） 3. 言葉がもつ価値を認識するとともに、言語感覚を豊かにし、我が国の言語文化に関わり、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。（[学びに向かう力、人間性等]）

指導計画（全8時間）

第一次 短歌の構造と技法の理解、読みの視点の獲得 3時間

第二次 短歌の読み解から物語創作・視覚表現への展開 7時間（本時 6/7）

授業について

短歌は、わずか三十一音に情景や感情、記憶を凝縮した日本語特有の詩的表現であり、読み手には「語られている言葉」を手がかりにして「語られない部分」を想像する力が求められる。短歌を読みことは、単なる意味理解にとどまらず、言葉の奥に潜む余情を読み取る営みである。しかし、従来の中学校における短歌学習は、技法の分析や鑑賞文の執筆が中心で、自由な解釈と根拠のある読みの両立が課題であり、現代的な感覚に寄せすぎた読みや、技法に縛られた定型的な読みは、短歌のもつ多義性や詩的な余白を十分に味わうことを妨げているという指摘もある。ただ、必ずしも「正しい」読みは、読みの「豊かさ」を保証するものではない。

本单元では、短歌の言葉を起点に、読み手自身の感性や経験を重ねながら、物語を紡ぐ活動や画像や色調などのモード（表現様式）に着目した視覚的な表現を通して、短歌の読みを深めることを目指す。読みの過程では、豊穣的かつ根拠ある読みの基盤として、①書かれている言葉や描写を丁寧に捉える、②そこから語り手の心情や情景を解釈する、③語られていない背景や前後の出来事を自由に想像する、という三層構造を重視する。こうした営みは、短歌に込められた情景から「詠む主体」を立ち上げ、そこから物語世界を広げる試みである。さらに、絵や図、色など非言語的手段で短歌を表現する活動を取り入れ、言語的表現と非言語的表現との往還を促することで、言語感覚を豊かにし、物事を多様な視点から解釈して表現する力が育まれることが期待できる。

教材には語彙や文法の面で言語的に抵抗の少ない現代短歌を採用した。学習者に馴染みのある口語表現や共感的に理解できる意味内容の教材を用いることで心理的な距離を近づけ、初学者にとって読みの入口となることを意図している。現代短歌は、意味が比較的明快で情景が具体的であるため、短歌教育の導入として適している。こうした読み解を通して、言葉の響きや構造・配列に気づき、さらに余白に意味を与える経験を積み重ねることによって、近代短歌や古典和歌の読み解に必要な素地を育成することができる。

本单元の目標は、まずは短歌の言葉を根拠にしながら自己の経験に結び付けて主観的な読みを形成すること、次にそれぞれの学習者が立ち上げたそれぞれの主観的な読みを比較・交流するこ

と、つまり最初に形成した読みを他者のそれと対置させて解体、再構築し、これらの営みを通して短歌の表現世界に豊かさがあることを発見することである。そして、その豊かさの源泉は短歌の表現だけにあるのではなく、共に関わる他者の存在とも無縁ではなく、その他者を発見し尊重して理解しようとする力を育てることである。こうした営みを重ねることで、自己と他者の視点を往還しながら、言葉を手がかりに世界とつながる力を養う。国語科における「言葉による見方・考え方」を深め、言語文化の継承に資する学びを実現することを目指す。

題　　目　　主体的に読みを深める短歌の授業

本時の目標

1. 短歌作品の特徴を捉えながら鑑賞し、短歌から情景や心情を想像することで自分の読みを構築することができる。 [思考力、判断力、表現力等]
2. 自己と他者の読みを比較することで、短歌の多義性や読みの多様性に気づき、自らの読みを再構築することができる。 [思考力、判断力、表現力等]
3. 発表や他者の読みに触れることを通して、言葉のもつ価値や詩的な余情に対する感受性を高め、国語を通して自他を理解し、自己の学習を振り返ることができる。 [学びに向かう力、人間性等]

本時の評価規準（観点／方法）

1. 短歌作品の特徴を捉えながら鑑賞し、短歌から情景や心情を想像することで自分の読みを構築している。 ([思考、判断、表現]／行動の観察)
2. 自己と他者の読みを比較することで、短歌の多義性や読みの多様性に気づき、自らの読みを再構築している。 ([思考、判断、表現]／記述の確認)
3. 発表や他者の読みに触れることを通して、言葉のもつ価値や詩的な余情に対する感受性を高め、国語を通して自他を理解し、自己の学習を振り返ろうとしている。 ([主体的に学習に取り組む態度]／記述の確認)

本時の学習指導過程

学習活動	指導上の留意点	評価の観点と方法
1 提示された短歌について、発表者以外の生徒がどのような短歌かを予想する。	・発表者が扱う短歌を事前に知らせないことで、純粋な読みの予想を促す。 ・短歌とともに複数の画像を提示し、どの画像が選ばれたかも予想させることで、視覚的イメージとの結びつきを意識させる。	【思・判・表】 (行動の観察)
2 発表者が、短歌・物語・画像をセットで発表する。	・発表者は、短歌の読みから導いた物語と、それに対応する画像を提示し、選んだ理由や読みの根拠を説明する。 ・同じ短歌を扱ったグループが連続して発表することで、読みの違いや共通点を比較しやすくする。	
3 自己の読みと発表者の読みを比較し、感想を書く。	・予想と実際の発表との違いに注目させ、読みの多様性や余白の解釈の幅に気づかせる。 ・ワークシートに記入し、グループで共有することで、自己の読みの変容を自覚させる。	【思・判・表】 【主体】 (記述の確認)

短歌読み取りワークシート③（解釈の観点）

■テクスト（根拠・描写・言葉）「描かれていること」

- ・短歌の中に実際に書かれている言葉・描写を抜き出す。
- ・形式・技法・語彙など、目に見える情報を整理する。

■意味・解釈「描かれていることから導き出されること」

- ・書かれている言葉から読み取れる情景や心情を整理する。
- ・短歌の描かれていない部分（余白）を想像する。
- ・語り手の背景、前後の出来事、登場人物などを自由に発想する。
- ・根拠をもとに、語り手の気持ちや状況を考える。

テクスト

観点	例・内容
人物・視点（誰が）	私、君、誰か
時間（いつ・どれぐらい）	朝、昼、夕、夜／一瞬、長い時間
季節・天気（いつ）	春雨、夏の蝉、雪
場所（どこで）	海、教室、駅
状況・できごと（どのような）	デート、仕事帰り、休日、授業中
五感	音、色、匂い、感触
表現の方法	ひらがな・カタカナ・漢字／言葉の選択（「思い」と「想い」）など
表現の特徴	体言止め・倒置法・比喩・擬人法・句またがり・リフレイン（反復）など
解釈	さみしさ、喜び、戸惑い
表現	ひらがな・カタカナ・漢字／言葉の選択（「思い」と「想い」）など
物語	静かな夕暮れ、にぎやかな教室
効果	自然詠、職業詠、社会詠、相聞歌、挽歌
物語	ゆったりした印象、緊張感のある印象
語り手や登場人物の背景	どんな人、どんな経験をしてきた、職業は、年齢は？
登場人物の関係	誰が関わっている、関係性は？
前後の出来事	この短歌の前後に何が？
想像される物語	この短歌が物語の一場面だとしたら？

短歌読み取りワークシート④

■読み取る短歌

組
番
班
氏名

■情報整理しよう！

その他	表現	五感	状況・できごと	場所	季節・天気	時間	人物・視点	観点
								テクスト どこから分かる？

意味・解釈
作品の中で何が起こっている？

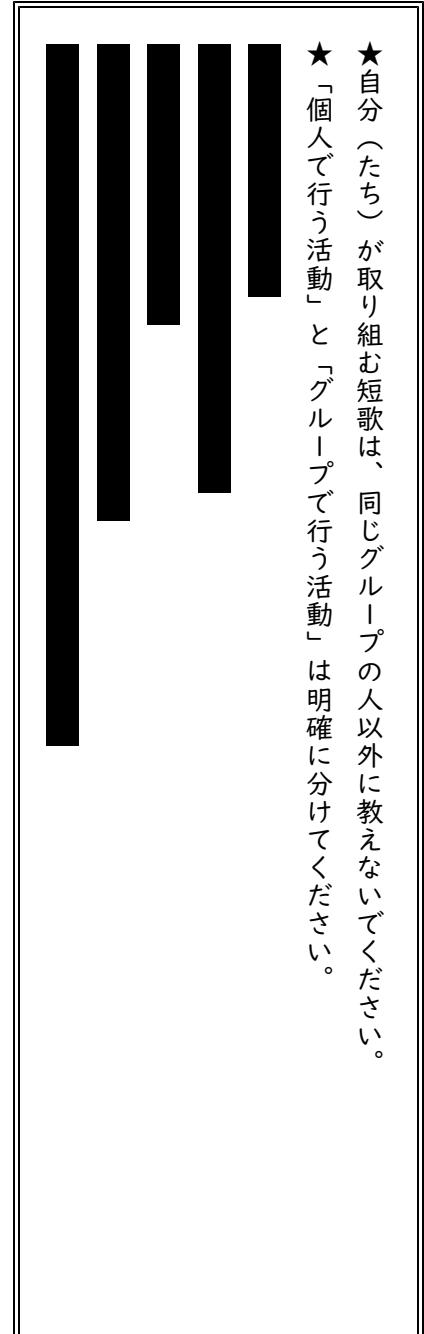
余白・物語
作品から何が想像できる？

--

--

短歌読み取りワークシート⑤（今後の授業展開）

- ★自分（たち）が取り組む短歌は、同じグループの人以外に教えないでください。
- ★「個人で行う活動」と「グループで行う活動」は明確に分けてください。



①初読みの印象

- 個人でじっくり短歌を眺めて、最初に感じた印象や頭に浮かんだ情景・感情を記述する。「RSS❶」

②短歌の分析

A. 短歌を読み取り「意味・解釈」までを個人で考える。

- 短歌の中の単独の言葉だけでなく、表現や組み合わせ、言葉の順序なども考慮する。

- 短歌の内容や情景を、自分の知識や過去の経験と結びつけて、どのように読みを深めることができるか（①の感想からどのように変化したか意識して）記述する。「RSS❷」
- 作者が最も凝縮し、焦点化したかった部分はどこだと思うか。その根拠を、短歌の表現に即して記述する。「RSS❸」

B. Aで考えたものをグループで共有する。

③物語の創作

A. ②をもとに、「余白・物語」を個人で考える。

- 友人の解釈や意見を聞いて、自分の分析（②-A）と特に異なっていた点、あるいは共感できた点は何か。他者の意見に説得力のある根拠があつた場合、具体的に記述する。「RSS❹」
- 対話を通じて、自分の短歌に対する理解はどうに変わったか。「新しい視点」を獲得できたと感じる具体的な内容を記述する。「RSS❺」

B. Aで考えたものをグループで共有する。

C. グループで物語を創作する。

短歌読み取りワークシート⑦（物語の創作）

③物語の創作

★物語を作ることが目的にならずに、「短歌に合う」物語ができるよう心掛けること。

(1) 短歌から読み取った、物語の核となるキーワードを書き出そう（2～5個）。

組	
番	
氏名	

視点	どうした (出来事)	だれが (登場人物)	どこで (場所)	いつ (時間)	(2) 物語の設定を決めよう。
(主人公・相手・第三者など)					

(参考) 型	心情・感覚 ○○さ・○○感	情景・世界観 ○○の雰囲気	情景・世界観 ○○のイメージ・世界観	情景・世界観 ○○の気配	主題 ○○の視点
例	切なさ／静けさ／あたたかさ／開放感／高揚感	夕暮れの雰囲気／夏休みの終わりの雰囲気	距離が縮まらないイメージ／風が通り抜けるイメージ	始まりの気配／季節の移り変わる気配	再会／挑戦／別れ／相手に届かない気持ち／すれ違い 見送る側の視点／残される側の視点／待つ人の視点

短歌読み取りワークシート⑧（物語の創作と視覚化／発表）

（3）物語をチェックしよう。

- 選んだキーワードが物語の中心になつていてるか。
- 短歌の雰囲気や世界観を壊していいか。
- 物語の結末は短歌の余韻とつながりそーか。

- ・物語を作る際に意識したこと、工夫した点を記述する。「RS⑥」

（4）視覚化

- ★短歌の言葉だけでは表せない「**感じ**」を視覚情報で表現してみる。
- ★その際には、物語を創作した際の「**キーワード**」（ワークシート⑦の（1））を意識する。

A. 短歌の「感じ」を表わす画像を一人一枚作成する。

- ★画像は、手書き・写真・デジタルアート等、何を用いても構わない。
- ★あくまで短歌の情景や出来事を表現するのではなく、「**感じ**」を伝えることを意識する。
- ★短歌に詠まれた具体物（観覧車など）の有無は問わない。

（※著作権に留意し、インターネット上の画像を用いる際は、Pexels 等を用いる。）

（※A-Iを用いて編集した場合は、変化の過程とプロンプトを記録する。）

- ・画像のポイント（工夫した点や意識した点）を記述する。「RS⑦」

（5）スライドの作成・発表

- ★スライドには、次の（1）～（5）を入れる。

- (1) 短歌
- (2) 四枚の画像
- (3) 短歌から読み取ったこと
- (4) 創作した物語（と工夫点）
- (5) 選んだ画像（と工夫点・選んだ理由）

- ★発表は各班五分程度とする。

- 発表ではできる限り、班員全員が発言するように分担する。



↑ O-DAN



↑ Unsplash



↑ Pexels

実践上の留意点

1. 授業説明

本授業は、多くの生徒が短歌に対して心理的距離を抱いているという課題意識から構想されたものである。事前アンケートでは、短歌に親しみを感じない生徒が約8割にのぼり、短歌の言葉遣いや短い言葉ゆえの読み取りにくさ、作者の意図が不明瞭である点等が苦手意識の要因として挙げられた。そこで本単元では、教科書採録の短歌の中から、言語的に抵抗の少ない現代短歌を教材として選定した¹。単元の設計にあたっては、短歌を多義的なテクストと捉え、「①余白から想像的に『物語』を紡ぐ活動」と、「②物語では表現しきれない短歌の持つ〈感じ〉を『視覚的』に表現する活動²」という「モードの違い」を活用した2つの活動の中で、他者と読みを交流し「自己の読みを再構築していく」ことを主眼とした。

実際の授業では、余白を埋める過程でテクスト自体の言葉から乖離することが懸念されたため、まず視覚情報である「画像」³をテクストに見立て、「テクスト（書かれていること）」をベースに「余白・物語（想像されること）」に拡げていく三層構造の読みの視点を理解する導入とした。その上で、参考となる16の観点（ワークシート③参照）を示し、横に観点・縦に三層を分けたワークシート（ワークシート④参照）を用いて、実際に全員で栗木京子「観覧車……」の読み解を行った。その後はグループ毎に割り当てられた短歌（A～E）の読み解、物語創作と視覚表現の作成という流れで進めた。

物語創作に際しては「短歌との整合性」に、視覚表現の作成に際しては「説明的（物語の描写）にならないこと」に注意を促し、いずれも事前に抽出させたキーワード（ワークシート⑥参照）を核とすることで短歌との距離を保つようにした。また、本実践では自己の読みの変容を主眼とするため、各活動を細かく区切り、その都度、個人活動・グループ活動・振り返りのサイクルを繰り返すことで、読みの変容の過程を記録するように考慮した。

2. 研究協議

成果として、画像の読み解を導入に用いたことで、「本文（テクスト）を根拠にする」という読み解の基盤が強固になった点が評価された。また、単一の教材に偏倒せず、複数の教材やモード（画像・物語）を組み合わせることで、生徒にとっての「読みのきっかけ」が増え、多義的な解釈を促す効果があつたことも指摘された。グループ活動においても、妥協点を探るのではなく、意見の対立や解釈の差異を可視化できた点は、主体的・対話的な学びとして有効であった。

一方で、今後の留意点として、自由な「物語創作」を取り入れる際、目標設定が曖昧になると、単なる創作に終始し「存在しない文脈」を深読みしすぎる（読み違いを起こす）リスクがあることも共有された。そのため、あくまで「読む力」を育てることを軸とし、表現活動が「よりよく読むための手段」として機能するよう、単元目標との整合性を常に意識する必要がある。また、グループ活動においては各グループの進捗を把握し、授業者が適宜助言を与えることが重要である。

最終的には、ジャンルの違いによる文章の機能や役割を意識させ、言葉を通じて自己・他者・世界との関係性を捉え直すことが、国語科が目指す「言葉による見方・考え方」の育成に資するという展望が示された。

¹ 用いた短歌は以下の5首。

A：幸福と呼ばれるものの輪郭よ君の自転車のきれいなターン（服部真里子）〈東京書籍・扉の短歌八首より〉

B：ほんとうにおれのなんかよ冷蔵庫の卵置き場に落ちる涙は（穂村弘）〈東京書籍・扉の短歌八首より〉

C：シャボンまみれの猫が逃げ出す午下がり永遠なんてどこにも無いさ（穂村弘）〈三省堂・短歌十首より〉

D：距離を置く作戦実行中ですが月がきれいで話がしたい（千原こはぎ）〈東京書籍・扉の短歌八首より〉

E：列車にて遠く見ている向日葵は少年のふる帽子のごとし（寺山修司）〈三省堂・短歌十首より〉

² 池田匡史,藤川千穂（2022）「高等学校国語科における〈感じ〉の共有を目指す和歌学習の開発 一言語化困難な心的体験を表現する試み」『日本教科教育学会誌』45(2),pp.25-38を参考にした。

³ 「短歌×写真のフリーぺーパー うたらば」(<https://www.utalover.com/>)掲載の写真を、短歌を隠して用いた。